

令和元年12月17日

宮城県議会議長 石川光次郎 殿

宮城県美術館の現地存続についての陳情書

拝啓 師走の候 ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は県政のためにご尽力いただきまして誠にありがとうございます。

さて、先般、宮城県美術館につきまして、2000席の新しい県民会館との複合施設として旧医療センター跡地に新築整備するという方針が示されました。昨年3月に取りまとめられた「宮城県美術館リニュアル基本方針」で、現在の建物の改修と増築という方針と具体的な内容が示されていただけに、多くの県民がこの突然の方向転換を驚きととまどいを持って受けとめています。

こうした声を受け、私共「まち遺産ネット仙台」は、12月10日付けで村井嘉浩知事宛、現地での存続を求める要望書を提出しております。しかしながら、12日には、集約移転案を中間案とする旨が担当課より示されました。

開館してからの38年間、県民は我がふるさとの美術館に深い愛着と誇りを抱いてきました。多彩なコレクション、さまざまな美術教育普及活動、開かれた創作室の存在など愛着の根源は多々ありますが、核心にあるのが周辺丘陵地と広瀬川の織りなす自然環境を巧みに生かした建築家・前川國男の設計であることはいまでもありません。川内の風景に寄り添う低層の建物と、自然地形を読み込んだ庭園デザインの見事さは、特筆すべきものです。私たちは他に代え難いこの環境の中で憩い、楽しみ、大切な時間を過ごし、創造力を育んできました。そしてこの価値を享受するだけでなく、この文化施設を活用し、表現活動を通して文化的価値をさらに積み重ね、高めてきたという自負も持っています。

美術館の移転は、近代建築物の少ない宮城県にあって、かけがえのない建築文化遺産を失うことにつながり、県民に大きな喪失感をもたらすことは明らかです。そしてまた、仙台市中心部の都市構造に大きな変換を迫るものでもあります。人口減少が急速に進み、公共施設のあり方そのものが根本から問い直される時代のただ中にあることは十分に理解するところです。しかし、県民への十分な説明のないまま、議事録すら非公開のまま性急に進めようとしている移転の方針は、とうてい納得できるものではありません。このまま進められれば、県政への大きな失望感、不信感が生まれることが想定できます。

移転の方針を見直し、あらためて時間と議論を重ね策定された「宮城県美術館リニュアル基本方針」に立ち返り、県民との対話の中で、私たちが愛する宮城県美術館のこれからをともに考えていただきますことを陳情いたします。

最後になりますが、この移転については美術専門誌『美術手帖』もいち早く報道しており、全国の建築家、美術家が注視する案件であることを申し添えます。

敬具

以上の通り、陳情いたします。

まち遺産ネット仙台

代表 西大立目祥子

陳情書賛同者（2019年12月16日）

伊藤トオル（写真家）

伊藤雅春（コミュニティデザイナー・コミュニティ政策学会事務局理事）

大沼正寛（東北工業大学教授*）

小野幹（写真家）

梶原聡（写真家）

木下壽子（一般社団法人住宅遺産トラスト理事）

小西玲子（建築家・玉川まちづくりハウス）

齊藤衣代（まちづくり・粋々まちなかプロジェクト代表*）

斎藤広通（近代仙台研究会事務局長）

佐藤ジュンコ（漫画家）

佐藤正実（地域誌出版・風の時編集部代表）

柴田治（画家・アトリエ光彩舎*）

庄子晃子（近代仙台研究会会長）

関口怜子（美術家・ハート&アート空間BeI代表）

高橋茅香子（翻訳家・朝日カルチャーセンター講師）

武田こうじ（詩人）

富田玲子（建築家・象設計集団）

林のり子（食文化研究家・食研究工房）

林泰義（まちづくりプランナー・千葉大学客員教授）

前野久美子（古書店主）

松隈洋（京都工芸繊維大学教授）

森まゆみ（作家・公益財団法人日本ナショナルトラスト理事）

吉見千晶（一般社団法人住宅遺産トラスト理事・事務局長）

（五十音順，*はまち遺産ネット仙台メンバー）